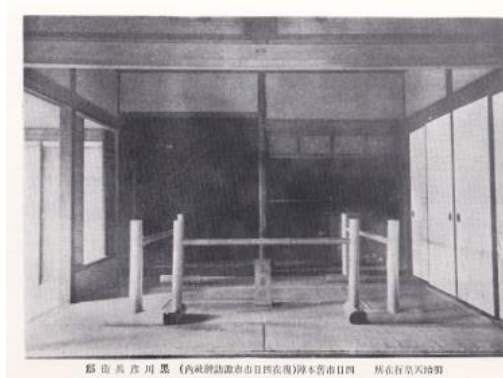


明治天皇の再幸

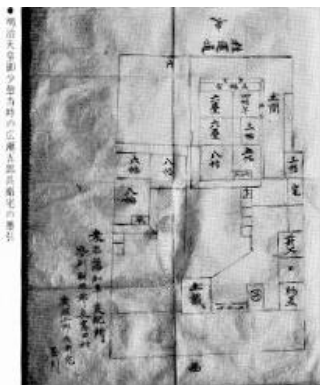
郷土史家 西羽 晃

明治元（1868）年12月に明治天皇は京都に戻られたが、翌年の明治2年には再び東京へ向かわれた。3月7日に京都を出発され、9日に関宿・川北本陣で宿泊。10日は伊勢街道を通り、松坂の和歌山藩陣屋で宿泊。11日に外宮文殿で宿泊。12日に外宮・内宮を参拝されて、内宮文殿で宿泊。歴代の天皇が伊勢神宮を参拝されるのは有史以来初めてである。13日に宇治を出発し、松坂で昼食、津・藤堂家賓館で宿泊。14日は神戸で昼食、四日市宿・黒川本陣で宿泊。黒川本陣は後に諏訪神社境内に移築されたが、昭和20（1945）年の空襲で焼失した。



←黒川本陣上段の間

15日は四日市を出発されて、現在の富田小学校正門付近にあった東富田村・広瀬五郎兵衛宅で休憩。



富田・広瀬五郎兵衛宅
（『富田をさぐる』1973年刊より）



「明治天皇御駐輦跡碑」
（富田小学校の正門付近）

15日は桑名宿に昼前に到着され、大塚本陣で昼食。午後は小船に乗って、打網を見物された。同夜は大塚本陣で宿泊。16日は桑名から船で前ヶ須新田（現弥富市）へ渡り、陸路を佐屋街道へ経て、熱田の尾張藩西浜御殿で宿泊された。28日に東京へ到着された。この時を以って首都は東京へ移ったとされている。

今回の行幸について。桑名で残っている記録は少ないので、三渡村と四日市宿の記録を紹介しておく。

三渡村（現松阪市）六軒は伊勢街道と初瀬街道の合流点で宿屋も多くて、賑わった場所であるが、明治元年12月に翌年の天皇通行に際しての注意事項が早くも出されている（『三雲町史』）。それによれば、当日に砂を道路上に撒くため、軒前に砂を用意しておくこと、道路や橋の修理は勿論、石灯籠の補強、樹木の整理、街道から2～3間引き込んだところに矢来を組んで街道へ出入りを制限、街道筋にある仏像や石碑を取り片づけるか菰で包み隠す事、寺門の扁額を取り外す事など、細かなことが指示されている。仏教色を徹底的に排除している様子が伺える。

四日市宿では本陣では当日に表門前に蒔砂をし、門から玄関までは盛り砂をし、玄関から御座所（上段の間）までの通路の両側に白布を張った。当日の宿泊者は全部で4,200人もあり、その蒲団は12,600枚も用意した。1人あたり3枚である。桑名まで荷物を運んだりする人足は4,245人であって、三重郡・朝明郡から員弁郡の北端である篠立・古田（現いなべ市）からも動員された。人足は当日の朝から必要なので、前日正午には四日市宿に集まるように指示された。